

目的 成人における道徳性が年齢と学歴の差異に応じて、どのような推移を示すのかを前回の報告に引き続いて検討する。

方法 年齢と学歴を異にする母親28名と、大学生(女子)20名に、2年次と4年次の2回にわたって個人面接を行なった。Kohlbergの3例話を提示し、道徳判断とその根拠を求め、判断の成熟度を評定した(宇川他, 1974, 1975, 1977参照)。

結果 道徳判断の得点を年齢と学歴別に示すと下表のようになる。変化の様相を年齢と学歴の両側面から検討したところ、(1)大学卒・短大卒・高校卒いずれの学歴群においても、年齢の増加に伴って得点が増している。(2)さらに、どの年代においても大学卒群が一貫して最高得点を示し、次いで短大卒となり、高校卒群は最下位となっている。(3)以上の結果から、学歴が同じ場合には年代が上がるに従って得点は上昇し、同一の年代内においては、高学歴の者ほど道徳判断がより高い段階に到達しているといえる。(4)ただし、年齢の増加に伴って生じる推移の様相は、高校卒・短大卒・大学卒群で必ずしも一様ではない。大学卒の場合には、上昇量に年代間の差が殆ど認められない。一方、短大卒群では30代から40代にかけての上昇量は20代から30代における変化の約2倍に達している。また、高校卒群においては、この傾向が更に顕著になり40代になると急激な得点の上昇を示している。従って、大学卒群と他の学歴群の間にみられる成熟度の差異は、20代で一番大きく、年代が進むにつれて次第に減少する傾向にあると言える。

年齢 \ 学歴	高校卒	短大卒	大学卒
20歳代	302.8	306.5	373.2
30歳代	308.6	328.5	385.3
40歳代	356.4	372.2	406.1